

~~~~~ 【資料】 「つばさ流通」でアルバイトをする法政大学生の声 ~~~~~

「キャンパスライフ」(92年12月10日号、法政大学多摩広報委員会発行)より転載

Q どんなきっかけでアルバイトを?

A 《アウト・ドア・ライフ/つちのこ》というサークルの先輩のさそいがあって始めました。アルバイトは主要な資金源になっているんです。(中略)

Q 始めてアルバイトをした時の感想は?

A ちょっとショックを受けましたね。《つばさ》で働く人達は、みんなとは言いませんが、ほとんどの人が生き生きと働くんですよ。ボクが以前アルバイトをしていた大手の運送会社では、いやな仕事はバイトにまかせて、社員はタバコを吸っていたり、マンガを読んでいたりでして、仕事場にはいつも暗い雰囲気がただよっていて、そういう姿を見ていたので、余計に《つばさ》の「生き生き」というのが鮮明にうかびあがって感じられました。どうも自分のもっていた労働観というか、「働く」ということのイメージが、突き崩されたような気がしましたね。

Q ふつうは引っ越し業は3Kとかいわれできればさげたい雰囲気はないのかな?

A ボクも含めて多くの人(?)は、楽をしてお金をもうけたいという気持を少なからず持っていると思うんですが……ボク自身としては、《つばさ》でアルバイトをすることによって「働く」とってことは、どうもそれだけじゃない、もっと大事な何かがあるんじゃないか?なんてことを考えるきっかけを与えられたような気がするんです。たしかに引っ越しという仕事は3Kだとは思いますが、《つばさ》で働く人達は、どうもそのような感覚をもちあわせていないようなんです。そんな人達と一緒に働いていると、3Kという言葉自体、無意味に感じられます。(中略)

Q それは具体的にはどんなこと?

A たくさんあるんですけど、例えば……大

学の講義を聞いていると多くの知識を得ることができると思うんです。環境問題とか労働問題とか国際関係とか……。でもそのような事象が、自分の生活とどのように切り結んでいるのかイマイチ見えてこないというか、「だからなんなんだ」と思わず言ってしまうようになることってあるんですよ。大学っていう枠の中だけでは、自分の日常生活と、講義で教わるような客観的な世界の知識の体系とをまったく別のものとして、自分で処理しちゃうんですよ。

でも《つばさ》で働きながら、トラックの中なんかでいろんな話を聞いたり、自分で実際にさまざまな体験をすることで、自分と自分をとりまく世界との関係がつながって見えてきたりすることがあるんです。

具体的には、自分達の乗っているトラックが出す有害な排気ガスについて考えることを通して、環境問題に接近するきっかけを与えられたことがありました。《つばさ》の人達の中にはそのことに対して強い痛みを感じている人達がいるんです。《つばさ》という会社は、共犯関係を認識することにとどまらないんですよ。なんとかその問題をのりこえようと模索するんです。例えば、試験的に電気自動車を導入してみたり、つい最近、鹿児島のエネルギー開発研究所という所で開発されたばかりの窒素酸化物の排出を低いレベルにおさえる装置の第1号機をトラックにとりつけたりもしているんです。(中略)

自分と自分をとりまく世界との関係のとり方や自分の生き方をどう選んでいくかといったある種、どぎつい問を迫ってくるような場所であるようにも思います(中略)。しんどく悩んだり、逆にはげまされたり、……とっても刺激的なアルバイト体験をしています。